

【宮崎県納税貯蓄組合連合会会長賞】

「負担」ではなく「責任」

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

三年 櫻木 力斗

私の故郷は、四方を森や山に囲まれた小さな町だ。春には新緑が萌え、秋には紅葉が一面を彩る。そして、多くの動物や昆虫が暮らしている。そんな自然の中で育った私には、森という存在が身近にあり、生活の一部にあった。

小学生の頃、祖父の趣味である登山と一緒に出かけたことがある。霧島連山やえびの高原、近場の低山などに何度か登った。どの山も緑が豊かで、それぞれ違った特徴がある。祖父は、「山は、たくさんの人が整備したおかげで、生き生きとしているんだよ。」と私に話していた。当時の私にはぴんと来なかったが、今、ようやくその意味が分かるようになった。

近年、「森林環境税」という新たな税が導入されたことを知った。この税の目的は、全国の森林整備や保全活動を支援するための財源を確保することにある。導入当初は、「また税が増えるのか」と否定的な声もあつたそうだ。しかし私は、この税を「負担」として捉えるのではなく、私達が果たす「責任」だと考えたい。

森林は私たちの暮らしと深く結びついている。二酸化炭素を吸収して、地球温暖化を抑制している。水源を守り、災害の被害を抑えるなど、その恩恵は計り知れない。だが、現在の日本の森林の多くは高齢化してきている。手入れがされないまま荒れてしまっている森林もあるそうだ。林業の担い手不足や資金不足がその背景にある。そうした中で、森林環境税は私たち一人ひとりが、わずかでも森を守る役割を担う手段となる。

地方に住む私達だけに関係するのではなく都市に住む人にも、森林と無縁ではない。私たち日本人は、おいしい空気を吸い、きれいな水を飲み、自然の恵みの中で生きている。そのことを思えば、森林環境税は単なる「取られるお金」ではなく、「森と共に生きるための参加費」と考えることができるのではないだろうか。

私が小学生の頃に見た美しい森や山、それが未来の世代にも引き継がれていくためには、今生きている私たちが、責任を持って守らなければならない。

山々を歩いて癒され、森の偉大さを感じ、そしてマイナスイオンたっぷりの空気をおなかいっぱい吸い込んだ。祖父との思い出はずっと大事にしたい。私もいつか自分の孫と同じ思い出を作りたいと思う。私たちが納める税の一部が、これからの森林に使われるのだから、それは「負担」ではなく、誇りを持って果たす「責任」なのだ。